

## 平成21年度 「社会で子育てを支えるしが」県民フォーラム 結果概要

社会全体で子育てを支える仕組みづくりを県民のみなさんと一緒に考える機会として、「社会で子育てを支えるしが」県民フォーラムを開催しました。

1. 開催日時  
平成21年11月8日(日) 13:30～16:00(会場13:00)
2. 会場  
近江八幡市勤労者福祉センター(アクティ近江八幡) 多目的ホール
3. 主催  
滋賀県
4. 企画・運営  
びわ湖放送株式会社
5. 参加者数  
139名
6. フォーラム内容

### 第1部 堀ちえみさんによるトークショー

「子どもキラキラ 私もキラキラ ～ちえみ流子育てトークショー～」

聞き手：びわ湖放送ニュースキャスター 南あずささん

5人のお子さんをもちながら、タレントとして幅広く活動されている堀ちえみさんに、ご自身の子育てにまつわるエピソードや、子育てをするうえで大切にしていることなど、対談形式でお話いただきました。

子どもの反抗期や思春期について「風邪のようなもの。信じてあげて、少し距離をおいて見守ってあげるように、わたしが変わらなければ。」と自然体で接してこられた体験や、子育て中の方にむけて「親が自身の人生を充実させ、キラキラした目をしているのを見て、子どもは安心して育つ。子育てをしているからといって、いろんなことを犠牲にせず、みんなにサポートしてもらいながらチャレンジして！」とメッセージを送っていただきました。



### 第2部 パネルディスカッション

「子育て共助の仕組みづくりについて～“子育て三方よしコミュニティ”の取り組み～」

コーディネーター

・びわ湖放送ニュースキャスター 南 あずさ さん

パネリスト

・子育て支援情報誌「PEACE MOM」編集長 廣瀬 香織 さん

・滋賀子育てネットワーク代表 鹿田 由香 さん

・絵本による街づくりの会 事務局長 平松 弘三 さん

・八日市に冒険遊び場をつくる会 廣田 喜紀 さん

滋賀県では、近江商人の「三方よし」にならって、「子育て三方よし」という言葉(子どもがみずから育つ力を育むための「子によし」、子どもを生み育てる人を支援するため

の「親によし」、暮らしやすい社会を実現する「世間によし」を次世代育成支援をすすめていくためのコミュニケーションシンボルとして発信し、社会全体で子育てを支える仕組みづくりにむけて取組をすすめています。そして、地域の住民のみなさんが主体となつてすすめる子育て共助の仕組みづくりを「子育て三方よしコミュニティづくり」と位置づけ、その実現を目指しています。

第2部では、滋賀県内で、子育て支援活動を実践されているパネリストの方々から、活動内容の紹介や、活動をするうえでの課題等をお話いただき、「子育て三方よしコミュニティづくり」の実現について必要なことは何か、ということを考えていく機会となりました。



### パネリストの方々の活動報告より

#### 「絵本による街づくりの会」事務局長 平松弘三さん：

平松さんは、「絵本は“愛”。絵本を読んでもらう時間は、自分のためだけを思って読んでもらえる、愛されている、と子どもが感じる時間。お母さんやお父さんのひざの上に座って、からだの温かみを感じながら、(読み手と聞き手が)同じ世界、同じ共通の体験をできるすばらしい形が絵本。」と考え、絵本をテーマとした子育て支援活動、地域活動をされています。



絵本のある交流スペース“かめの部屋”を運営し、そこにやってくる子どもたちと接する中で感じたことをパネルディスカッションの中でお話ししました。「(かめの部屋に)親子で来られる方がほとんどと思ってやりはじめましたが、ほぼ毎日子どもだけでやってくるケースもあります。そんな子どもたちと話をしていると、今の子どもも大変だと感じます。ご両親の離婚や不登校問題などで、居場所のない子どもたちが増

えてきていることを感じます。」「ひたすら子どもたちの味方になって、信頼関係を築いて、少しでも幸せな、安心な気持ちになれる場所をつくってあげたい。」

「“かめの部屋”は、単年度の助成金により実施していたため、今年の11月でやむなく部屋を閉めました。今後、駅前の商店街の空き店舗を借りるなどして、もう一度やりたいと考えています。」

絵本による街づくりの会では、他にも、絵本原画展や絵本作家による講演会、絵本と音楽によるコンサートなど、絵本をテーマとした様々な活動をされています。

「絵本による街づくりの会」ホームページ <http://www.ehocity.org/>

#### 「八日市に冒険遊び場をつくる会」プレリーダー 廣田喜紀さん：

廣田さんは、子どもたちが安心して遊べる場所を、ということで、以前あまり使われていなかった公園を「冒険遊び場」として運営する活動に携わっておられます。「冒険遊び場」は、子どもが主人公の遊び場。子どもの遊びの内容を大人が決めない、けがや物を壊したりすることに関して自分の責任で自由に遊ぶという精神を、大人も子どもも共有して運営されています。「まちづくり協議会」が母体になり、住民によって運営されており、それを行政が施策に位置づけてバックアップする形で活動が実現しています。

「冒険遊び場には、家庭や一般の公園では触れることのできない自然や道具、手作りの遊具があります。また、火を使って遊ぶこともしています。公園の真ん中には水路が流れているので、大胆な水遊びもできます。」「子どもたちは本で調べた実験を試してみたり、自分で材料を集めてドラム缶風呂を作ったり…。」と、子どもたちが自由に遊びを考え、実践する様子を話してくださいました。



八日市冒険遊び場で子ども達が遊ぶ様子

また、「冒険遊び場では、異年齢の子どもや、他の学校、幼稚園、保育園の子ども、様々な大人と関わることができ、その中で、子どもたちは自分の居場所や役割を見つけ、社会性を体得」していくことや、「親も自分の子ども以外にも目を向けることができ、子どもによっていろいろな育ちがあることを知っていく」こと、また、「公園の近くにブラジル人の方が多く住んでおり、積極的に一緒にやっという雰囲気を作っています。そういうことを小さい頃から子どもたちが見ているのは、国際理解のうえでも大切なのでは」と、「冒険遊び場」で様々な人々の交流を大切にされているお話をしてくださいました。

「八日市に冒険遊び場をつくる会」ホームページ <http://yokaichiplaypark.shiga-saku.net/>

「滋賀子育てネットワーク」( )代表 鹿田由香さん 子育て支援者間が連携できる  
広域ネットワーク：

鹿田さんによると「12年前から活動をしているが、その当初は子育て支援という言葉も、育児サークルすらなかった。今は本当に支援が増えた」とのこと。一方で、「(そういった支援が)本当に必要な人に届いているかな?」と思いながら活動しています。」

「子育ての不安感や孤立感をお母さんがたった1人で担っている。閉じたカプセルの中で育児がすすめられていると感じる。まずは、身近な情報を親御さんに確実に届けること、それから居場所づくり、それもイベント的なものではなくて、日常の居場所を支える、そういった支援が今求められていると思います。」



そして、県内で居場所づくり等を行っている子育て支援活動例についてもご報告いただきました。鹿田さんご自身がされている“コミュニティカフェ アプリコット”は水口町の空き店舗を活用して運営されている新しいタイプの子育て拠点。子どもさんが遊べて、それを見ながらお母さん同士でお茶を飲みながらおしゃべりができる。「お家で作っているような食べ物を提供していて、できればそのレシピも持って帰ってほしいな。」

鹿田さんが代表を務める「滋賀子育てネットワーク」では、昨年度から2年間の事業として「地域力を生かす子育ての“わ”づくり研究事業」を県から委託されて実施。この事業は、地域にどんな支援があって、どの程度お母さん方に提供できているのかを調べたり、お母さん方の抱く不安感・孤立感を緩和するために地域の資源を生かし、地域での仕組みづくりを検討するもの。「主に水口町周辺を実施地域としてやっています。大きな事業の柱として、ひとつは“誘い出し”。家にこもりがちなお母さんに、地域の情報を届けたり、アンケートで声をお聞きしたりして、地域への誘い出しのきっかけをつくる。もうひとつの大きな柱は“コーディネーター”。地域の宝(子育て支援の資源)をお

互いに知り合えるように、つなげるように、地域での子育て支援者の交流会なんかもしています。」

“もっと知り合おう！そこから始まるネットワーク”をキャッチフレーズに活動されているとのことですが、「ネットワークって結局、何かの時に頼れる人がどれだけいるかということだと思います。県域でどれだけ支援があるのかということをお母さんや支援者も、できれば地域の人にも知っていてほしい。そのためにも、あちこちにいろんな居場所があってほしい。そしてそれは、サービスを買うのではなくて、お互いさま、いつもありがとうって言えるような間柄であること、それを目指してネットワークづくりをしていきたいと思います。」

「滋賀子育てネットワーク」ホームページ <http://www.shigakosodate.net/>

「コミュニティカフェ アプリコット」ホームページ <http://apricot.shiga-saku.net/>

### 子育て支援情報誌「ピース맘」の編集長、廣瀬香織さん：

廣瀬さんは、お二人目のお子さんを出産後、広告ディレクターとして独立、起業。仕事と子育ての両立に奮闘する自身の経験を生かして、子育て情報誌「ピース맘」を企画されています。

「子育て支援情報誌って（さきほど）紹介していただいたんですが、実はわたしの感覚では、子育てしているお母さんを“支援”しようって思っている情報誌ではないんです。“自分らしく育児と暮らしを楽しむためのフリーマガジン”ということで、自分の時間と子育てを両立させるスタイル、いろんなところで女性が活躍して、子どもを育てながら働いていくということが普通に多いんだよっていうことを毎回誌面の最初のところで伝えていきます。また、保育園や学童保育、子育て支援センターなどの紹介をして、それぞれの取組もお伝えさせていただいています。」



また「ピース맘」では、情報誌の発行以外にも、企業と連携して様々な活動をされています。毎月1回、映画館のスクリーンを使って絵本の読み聞かせを行う“シネマで絵本”には、たくさんの親子連れが足を運ばれるとのこと。その他にも、親子クッキング、絵本作り、サークル等、幅広く活動されています。

「ピース맘のイベントに来てもらうときに、会員登録をさせていただいています。これは、どれだけの方にピース맘を見ていただいているかを知る目安のためにしているんですが、この1年間で1000人を超える会員登録があり、こういう支援が求められていたのかなあ、と感じています。」

今後について、「情報誌から少し飛び出して、ラジオ番組をもったり、テレビに出たり、ますます滋賀県で楽しい子育てのイメージをアップしていけたら、と思っています。」

「ピース맘」ホームページ <http://www.peace-mom.net/>

### 今後の課題や方向性などについて

活動をされている中での課題や、今後の方向性について、パネリストのみなさんにお伺いしました。

「子育て支援のイベントに来られるお母さん方には、どうしても（サービスを）受けている感じがある方がいらっしゃる。無料のイベントに対して高い要望やクレームを言うてしまわれることが悲しい。そういうことを言うと、運営自体が厳しくなったり、なく

なってしまうことになり、結局は参加しているお母さんの首をしめることになる。環境をつくる側も、参加してもらおう側も、子育て環境を良くしていこうという意識があれば、いろんなことができるのではないかな。」(廣瀬さん)

「“カプセル育児”、つまり、お母さんは自分の子どもしか知らず、子どもも自分の親しか知らないまま、小学校ぐらいまで育っていくのが、すごく怖いと思います。どうやったら(そのカプセルが)パカッと割れるのかを一生懸命考えています。今は、お家の中でためらっているお母さん方を、どうやって連れ出すか、今あるいろいろな支援を知ってもらえるか、そういう仕掛けを考えているところです。」(鹿田さん)

「まちづくり協議会で、町歩きをしたときに、子どもが外で遊んでいないという実態があったのが、この(冒険遊び場の)活動を始めたきっかけです。野外活動の必要性を社会に訴えかけていきたい。野外遊びは、誰か友達と遊ぶことが多く、友達を知りつつ、自分を知ることができる。そこで、自己を確立していく。子どもたちが野外で安心して遊んでいける場、また、子どもたちだけでなく、住民の方みんなの憩いの場になるような公園づくり、地域づくりをしていきたい。」(廣田さん)

「家庭の中に確固たる居場所があるのが一番いいが、それ以外にもたくさん居場所があって、いろんなところで子どもが救われる仕組みを社会でつくるのが今の一番の課題。」(平松さん)

#### わたしたち1人1人にできること

今後、地域の住民の方々が主体となって取り組む子育て共助の仕組みづくりを進めていくうえで、1人1人がどんな意識を持って、どんな取組からはじめるのがいいのか、パネリストのみなさんに一言ずつ伺いました。

「やっぱりママが元気であること。ママが家でニコニコしていて、自分らしく子育ても楽しんでいるし、自分自身の人生も楽しんでいる姿を子どもたちに見せることが、(まずは)誰でも取り組めることではないかなと思います。」(廣瀬さん)

「とにかく関心を持ってほしい。子育て支援に関心がある方は、関心のなさそうな人にも伝えていってほしいですし、できれば仲間を引きずり込むぐらいのつもりで、どんどん広げていってほしい。」(鹿田さん)

「まずは、友達のお子さんを預かってどこかへ連れて行ってあげるとか、家族ぐるみで遊びに行くとか、さみしそうにしているお母さんに声をかけてあげるとか。冒険遊び場にきて、ちょっと道具を片付けたっていうだけでも地域参加になると思いますので、身の回りにある簡単なことから始めていっていただけたらなって思います。」(廣田さん)

「子どもは“未来そのもの”、子どもがいなくなったら人類の未来はない。だから、子どもが幸せであるということは未来が幸せということ、子どもが悲しい思いをしていけば、未来が悲しいということ。この至極当たり前の論理でみんなが動き出したら、良い社会になるのでは。」(平松さん)

#### 最後に、各支援者間の連携や行政との連携について、鹿田さんに伺いました。

「まずは、いろんな資源を探す。いろんなところに、いろんな支援があります。公も、NPOも、個人でもいろいろされています。そうしたものを一つでも多くみつけて、知り合うこと、それは公も個人も企業も関係なく、あればあるほど、つながりが強固になっていくと思います。まずは、地域で共助ということを考えて、でもそれだけだと活動は先細りになるので、さりげなく後ろから公も支えていただく。地域の資源と色々なサポーターがタッグを組んで、いつまでも続く、続けられるような活動が広がっていくといいなと思います。」

## 7. 来場者アンケートより

### 本日のフォーラムの感想は？

- ・ 5人の子どもを育て、仕事もこなし、キラキラしている堀ちえみさんの話を聴き、元気をもらった。
- ・ 子どもを保育園に入れて働いているが、毎日が忙しく、むなしくなる時がある。仕事を続けるのは無理かと思っていたが、今日の話聞いて親が仕事をしている姿を見せるのはいいことだと思い、がんばろうと思った。
- ・ いろいろな形、いろいろな方法の子育て支援があり、それに携わる人たちがいることを知った。それらをうまく使って、協力もしていけたら。
- ・ 具体的な内容で、実際の体験や活動に基づく話が聞けてよかった。子育てについて何が大事かを教えてもらうきっかけになった。
- ・ 「家での子どもの居場所」を考えさせられた。「自分の居場所」も増やしていこうと思う。
- ・ できるところから子どもと関わっていきたいと思った。
- ・ (パネリストの方々の活動は、) どの活動もすばらしく、自分の地域にもぜひあったらいいなと思うものばかりだった。“お互い様”の活動がポイントだと思った。
- ・ (話の中には) 理想なことがたくさんあったが、現実には時間がかかる、お金がかかることで、変化していくにはたくさんの課題があるだろうなと思った。

### 「社会全体で子育てを支える」ために必要だと感じることは？

- ・ 今はいろんな情報がありすぎるし、みんな自分のことで精一杯。もっとゆとりがもてる世の中、子育てできる環境ができれば。
- ・ 地域、そして子育て世代も感謝しなければならない。やってもらってあたりまえと思うことのないような親も育てなければと思った。
- ・ 小さなことで良いので、子どもたちの話相手になったり、一緒に遊んだりして関わっていったら良い。
- ・ 育児で毎日がしんどく、孤立している感じがある。子どもを連れてでかけるまでの準備も大変。もっとそういう母親の気持ちを吐き出せる場があればいいな。子ども目線、親目線の支援それぞれが進むといい。
- ・ 今日みたいなフォーラムに多くの人に参加してもらったり、1人でも多くの人に、子どもを地域で育てていく大切さを知ってもらうこと。
- ・ 子育て世代の時にいろんな支援がほしいと思うだけでなく、子育てから自分が卒業した後も支援に参加していくことが必要。
- ・ 親では解決できない子育ての悩みをサポートする場所も必要。
- ・ もう少し、いろんなところに(子どもを)預けやすい環境になれば、もっと働きやすいと思う。